

## 「牧口常三郎研究ノート」新蒐集資料の覚書（４）

### 「教育学の目的」

山口 徹

教育實際家の熱望する価値ある方法は、  
果して如何にして生ずるか。（中略）  
恐らくは實際家の血の出る様な悶えの眞剣味から  
湧き出るより外に途はあるまい。

（牧口常三郎「教育学の目的」、「神奈川県教育」第269号（1930＝昭和5年10月1日発行））

牧口常三郎は、1930年（昭和5年）10月に発刊された雑誌「神奈川県教育」269号に、「教育学の目的」と題する文章を寄稿している。その内容は、彼がこの直後に発刊することになる『創価教育学体系』（同年11月18日に第1巻を発刊）の、ごく簡明な要約とってよいものである。

寄稿の末尾には、雑誌編者による、牧口の簡単な略歴が載っている。それは、次のようなものである。

往年「人生地理学」を著して地理科の革新を促し、其の後「郷土科」「地理教授法」も著はしたる牧口氏は目下は東京市白金尋常小学校長として数十年の研究の結果を綜合して、創価教育学を近々發表せんとしつつある由。

ここでの牧口の肩書きは「創価教育学大系著者」となっている。この年の4月に、牧口は小冊子「創価教育学大系概論」（創価教育学会支援会）を発刊している。そこでは、『体系』は12巻まで構想されていたことがわかる（そのうち牧口が実際に発刊できたのは4巻までであり、続刊の道は、牧口ら創価教育学会幹部の、不敬罪及び治安維持法違反容疑による検挙によって永遠に閉ざされた）。

4月に「概論」を完成させ、5月には教育雑誌「環境」（発行人＝戸田城外）が第三種郵便物として認可。9月には牧口は「教育学の科学体系に於ける位置」（「教育週報」280号に掲載）を寄稿している。11月18日に『体系』第1巻を発刊。その2日後には「創価教育学緒論」（「環境」掲載）を、12月には「説明科学と規範科学」（「教育時論」掲載）をそれぞれ寄稿。1930年は牧口にとって、小学校長としての職務を縫って、教育改革運動の本格的な出発の年となった。

牧口にとって創価教育学とは、既存の学校教育制度の枠内を一步超え出て、独自の教育改革を興す試みであった。「教育学の目的」の執筆も、この新たな流れのなかでのことである。初めて世

に問う「創価教育学」の理念を、学校教育に携わる人々に、より広範に訴える目的で書かれたものであり、文面をみると明らかなように、読者として、特に実際の教師を意識している。

非常に短い文章であり、特に要約すべき点はないが、文中で最も印象的な部分について一言しておきたい。それは、冒頭に引用した一節である。

「父母保護者たる一般民衆」が、今まで以上に教育目的に強い関心を持ち始めた時、彼らも納得し、教育学の目的も果たし、何よりも教育を受けた子どもたちのその後の人生にとって、最も価値ある教育方法は、どうやって生まれるか。それは、「恐らくは實際家の血の出る様な悶えの眞剣味から湧き出るより外に途はあるまい」と言うのである。

「教育学の目的」が載った「神奈川県教育」には、教育勅語を徹底すべき旨を主張する「所感」や、皇室への尊敬を根本として「国運進展の基礎を培うことに益々励むべきである」とする「青年教育の更張」という文章も載っている。

この2年前の1928年には「張作霖爆殺」、翌年（1931年）には「満州事変」が起きている。70年以上を経て相対してみると、この時期に、教育現場での実際の教師の苦勞からしか価値的な教育方法は生まれぬ、という、牧口が持っていた「常識」の強さ、独創性に着目せざるをえない。この一文は、教育行政は教育内容に干渉してはならない、という牧口の信条——それは軍国日本の教育政策に相反せざるをえなかった——と、ちょうど表裏になっている。

牧口の思想の中心には、この直後に発刊が開始された『創価教育学体系』に明らかなように、「上からの改革」を鵜呑みにせず、相対化し、その誤りを徹底的に批判する、「教育の経済」至上主義／「児童の幸福」中心主義とでもいうべきものが脈打っている。その批判精神、具体的な改革方法論は、決して古びておらず、むしろ今こそ光を当てるべき価値があるだろう。

野田正彰は、現今の教育行政の歪みを憂い、「今日の教育再生とは、教育行政が教師を尊敬することに始まる」と記した（「世界」2007年2月号）。今もまた、この当たり前の「常識」が忘れ去られている。

実際に児童・生徒と日々接する教師の「血の出る様な悶えの眞剣味」が、教育現場で実を結ぶように教育環境を整え、知恵を尽くすのが行政の役割である。この一点をはき違え、行政が教育内容を強制する方向を強めると、その都度不安定な政府の意図によって公教育は左右され、システムは暴走する。眞剣な教員であればあるほど、心から血が噴き出し、出血は止まらなくなる。

列島各地で噴き出し始めた教師の血を止めるためにも、牧口常三郎が創唱した創価教育学の精神を現代に生かす努力を欠かすことはできないと、筆者は考える。

「神奈川県教育」第貳百六拾九號

### 教育學の目的\*

創價教育大系著者 牧口常三郎



國民教育といふ大規模なる組織の中に、その身を投じて國家の大任を負ひ、之を果さんとするに當つて吾々が第一に講究しなければならぬことは、仕事の目的觀の確立である。教育者が其の目的觀を確立するに當つて、先づ考へなければならぬのは、教師の目的と被教育者の目的とが同一であつてはならぬ如く、教育學の目的と教育の目的との異なるべきことを意識しなければならないことである。

教育の目的は、教師に教育を囑託して居る父母や社會が、被教育者に期待する所のものであるが、教育學の目的は、此の目的を達成せしむる爲めに指導するに當つて、目指す所の目標であつて、教育方法に就ての歸着點を意味する。

教育學の目的は、教師が、父母や國家社會が被教育者に對して期待する所の目的に向つて、被教育者の進行するのを指導するに、最も有効なる方法を以てせんとする希望を滿さんが爲めの方法を講究するのにある。



教育學の目的は

盲目的の生活を明目的の生活への指導である。

無意味の生活を有意味の生活に。

無價値の生活を有價値の生活に。

反價値の生活を正價値に。

低價値の生活を高價値に。

無駄の生活を有駄の生活に。

無益行動を有益の行動に。

有害の行動を有利の行動に。

不善の行動を善良の行動にと指導する原理を得んとするのにある。

如何に無意味の行動の多きや、如何に無駄の言語の多きことや。要するに盲目的行動の多きことよ。

教師の一言一言を悉く合目的にせよ。有意味にせよ。



教育の目的が、之に應ずる手段も、價値を目的とすることには間違はない筈。人生といふ大目

---

#### 資料凡例

旧字体については、なるべく原文の香りを残したいという観点から、2004年段階でJISコードに登録されているものについては、極力、旧字体を用いた。登録されていないものについてのみ、新字体に変換した。

的達成の手段である以上、價値を離れては講究されないし、又その指導する手段を目的とする教育學に於ても、價値を離れては考へられないものであるから、價値の研究が何よりも先づ必要となつて来る。

尚、これを具體化して謂へば、教育目的達成の經濟的なる手段は何ぞといふのが、吾々兒童を相手とする教育者、及び父兄の當面の研究問題でなければならぬ。

何の事業に於ても、目的意識の不明確なる人は、一々他人の指揮を受けて活動する外途のないもので、一人前の大人としてこの資格のない人で、幾人かの共同生活の團體に於て、相當の位置にあり、殊に其の中の或る重要なる位置にある人が缺陷を生じて失策をし、其の極無能として信用を失つて遂に失脚するのは、大概目的意識の明瞭でないのに基づく



教師の仕事を側面から観ると、如何に無意識的活動の多いことよ。固より、一舉手一投足の些末な事柄までを、一々意識して活動せよとは六敷い註文であらう。さりながら、理由の不明確な事柄を他人か遣つて居るからといふ單なる理由によつてなしつゝある傳統的、模倣的活動は、人格の價値創造といふ高尚複雑で、且つ最も重要なる聖職の本質に對して、斷じて承認さるべきものではない。幸に事の利害關係の最も密接なる、父兄保護者たる一般民衆の目醒めない間は、それに乗じて姑らく瀰縫しておくことが出來やうが、一度其の愛兒の行末までも見通して、其の教育手段を考へるだけに至つた父兄が、日に日に年々其の兒を託する教師について、右の條件の缺乏に氣付いたときは、恐らくは不安でたまるまいから、結局は之れに適當した教師を選ぶといふ、寺子屋制度の學校が最上の理想となる事であるまいか。

畢竟、目的觀念を意識して、之を生活の原理原則として、自發的に之に達する手段の觀念、即ち順序方法の智識を構成するだけの智能の發達しない人の免れ難い所で、他の職業ならば忍ぶべしとするも、教師の仕事だけはどうしても我慢することの出來ない筈のものである。斯様な教師は父兄や社會が無意識の今日に於てこそ存在の餘地はあれ、發達した將來に於ては當然驅逐されなければならぬものである。

教育學は可能性の少い空想を構成して、目前の煩悶を満足して足れりとすべきものではない。飽くまで實際に直面した可能性を尋求すべきである。



教育實際家の熱望する價値ある方法は、果して如何にして生ずるか。これは教育學者乃至哲學者等の人性を見詰めた眼から、人生中から取り出されるが如き考を以て他力的に依頼しても無益である。恐らくは實際家の血の出る様な悶えの眞劍味から湧き出るより外に途はあるまい。昔からの學問發見發達史上よりしか思はれる。

往年「人生地理學」を著して地理科の革新を促し、其の後「郷土科」「地理教授法」も著したる牧口氏は目下は東京市白金尋常小學校長として數十年の研究の結果を綜合して、創價教育學を近々發表せんとしつゝある由（編者）

（翻刻：北川洋子）